

粹人 尾崎国蔵さんを送る

川 島 誠一郎 (動物学専攻)

平成6年3月、尾崎国蔵さんは東京大学を定年退職されます。尾崎さんは昭和49年7月理学部動物学教室に着任され、爾来約20年間、動物学教室と理学部2号館の保守・環境整備業務万般に携わってこられました。

尾崎さんははじめ理学部2号館3階の動物学教室受付におられました。15年ほど前に改修が終わってからは2号館正面玄関の火災警報盤の設置してある部屋に移られました。お仕事の大部分の時間は動物学教室の世話に費やされたのですが、2号館(動物、植物、人類、地理が入っています)に共通の業務もとても熱心に推進してくださいました。それらには、防災訓練・環境整備週間の準備と実施、朝7時の玄関開扉・夕刻の閉扉、玄関やゴミ箱周辺の整備、冬季のポイラーセット、号館全体に対する整備的監視の目配りと受付的な仕事、などがあります。最近の実験廃棄物にはいろいろなものがあり、研究者が処理手順の指示にきちんと従えば問題はないのですが、不心得者はあとを絶ちません。特に、注射針が裸出していると業者はゴミ一切をもっていってこないことになりますので、何度か尾崎さんを通じて叱られたことがあります。その後も、尾崎さんから積極的な指示をなにかと頂き、未然に解決した問題が沢山ありました。

2号館は街に近いこともあって野良猫の遊び場や繁殖地として栄えていて蚤をまきちらします。蚤や蚊は動物学教室で対策を立てるべきであるという正当な理由から、尾崎さんは蚤取粉を買ってきて号館に配布したり自ら散布してくださいました。教室の外国人客が足をくじいた時、肩に担いで病院へ連れていったり、立看板を上手な大工仕事で作ってくれたり、トイレ詰まり・汚水逆流・

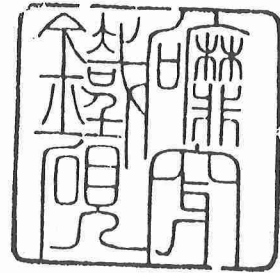
剣飾り爆裂のようなボロ建物故の問題の解決、などに尽力してくださいました。このような面倒なことをいつも機嫌よく、なんでもないことのようにやったださるのです。尾崎さんの縁の下の力持ち的存在は誠に貴重だったことをひしひしと感じ、感謝しています。東京大学において、100年以上の歴史をもって基礎的な自然科学分野の一端について世界的リーダーの役割を果たしてきたし、名実ともにさらに発展しようとしている4教室ですが、尾崎さんのような方々のご支援なしでは教官の意欲は決して実現されません。

尾崎さんはどうして機嫌がいいのだろうかという、粹な人だからです。最近はお酒をやらず甘いものなど召し上がるのですが、典型的な下町の左利きで、楽しい話をよく伺ったものでした。大店のお嬢様に惚れられて奥様になさったという逸話もその頃に聞きました。粹人ぶりは趣味によく現れています。川柳、篆刻、絵てがみで自分史を綴ることなどですが、こういう方、理学部にはなかなかおられないでしょう。理学部広報には送る言葉の前には送られる方のお話があるのが習わしですが、しゃしゃり出るのは嫌だよ、という尾崎さんから写真と川柳をお預かりしましたので掲載させていただきます。川柳は、駄洒落や言葉遊びの狂句やらへそ曲りの皮肉ではなく、作者の倫理感に裏付けられた風刺を旨とした味わいが楽しめます。尾崎さんは弓削川柳社会員で、氏の代表作を五つ選びましたが、第5句は句碑が川柳公園に建てられています。数句は「朝日せんりゅう1250選」(朝日新聞社)に収録されています。篆刻は石に雅号印を刻んだりするもので、動物学教室事務室に飾ってある尾崎さんの「磨穿鉄硯」(鉄製の硯に穴を開けるほど勉強せい-雑用にか

まけてはいけません) という逸品を再掲申し上げます。



尾崎国蔵氏近影



尾崎氏篆刻「磨穿鉄硯」

仲人を安請け合いで妻ともめ
祭礼の寄付を拒んだ太鼓聞く
逢いたいと書かず水仙咲きました
タクシーの昼寝窓から足を出し
深刻な話しで道の端に寄り

(以上、尾崎国蔵氏作句)



尾崎さんは退職された後も動物学教室と2号館に時間を限っておいでくださるということですので、私たちにとって誠に心強い限りです。ご健康に留意され、これまでよりも時間にゆとりをもってご趣味をお楽しみになられますようお祈りし、送る言葉とさせていただきます。